

保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人向陽会
施設名	認定こども園 ひばり
報告者（役職）	竹澤 尚美（園長）
住所・連絡先	福井県福井市石盛2丁目210
	☎ 0776-56-0150
	E-mail Kouyo-hibari@titan.ocn.ne.jp

○タイトル（保育計画）

人間愛 一豊かな人格の育成を 身体と心の育ちを紡ぐ保育

○主な助成備品

元気っ子ジム バランスランド ミニロープ 鉄棒
室内遊具 等

1. 保育計画策定の目的

本園は、令和4年4月に開園した園である。近年人口が増加している地域であり、若い世代で生活する核家族が多く、子育て支援が必要な地域であると思われる。

本園の理念は、入園児童の健やかな育成である。豊かな環境の中で、直接体験や出会いの機会を創りながら保育を展開していく。子どもたちの主体的な活動としての遊びを十分に確保し、その日々の繰り返しの中で自我を形成し、生きる力の基礎を培うというものである。また、本法人の目指すテーマは「人間愛」であり、園児や保護者等様々な方との関わりを大切に、寄り添っていきたいと考える。

子育て世代の家庭が子どもを安心して預けることができるように、十分な情緒の安定を図ることのできるような環境設定が不可欠である。子どもたちが家庭環境と同様、安心して保育を受けることのできる場の確保、自分の興味関心の高い遊具で遊ぶことができる環境を整えながら、園児の健康な身体づくり、楽しく豊かな保育を目指していききたいと保育計画の策定を行うものである。

2. 具体的な実施内容

（元気っこジムで遊んでみよう）

それぞれのクラスにおいて、バランスジムを組み立てて遊びに取り入れた。
発達年齢に応じ、遊び方、動きのバランスを考えながら、置き方を整える。

<0・1歳児>



一人ひとりの発達に合わせて保育教諭が見守りながら関わっている。柔らかい素材のため0歳児も危険が少なく、遊びの中で十分に体を動かしながら関わっていくことができる。1歳児では、丸太によじ登ったり、アンバランスなマットの上を工夫して歩く姿が見られた。一本橋は今までは園になかったため、喜んで関わる姿が見られた。一本橋を渡るときに人差し指を立てて忍者のように歩くかわいい姿も見られた。また、一本橋から、ジャンプしたり寝転んですべったり、または、保育者の「バスにのってゆられてるゴーゴー」という歌に合わせて体を動かしたりとリズムに合わせるような動きも見られた。



回数を重ねるうちに、保育者の補助がなくても慎重にバランスを取りながら渡るようになった。そして、渡りきると嬉しそうに「もう一回！」と再度チャレンジする姿が見られるようになった。

<2歳児>

(丸太渡りから別の遊びに)

丸太につかまってイモムシのように渡ったり、座っておしりで動いたりしながら遊ぶ中で、ある子どもが「先生!! “だるまさんころんだ”して」と話しかけてきた。保育者の「だるまさんがころんだ」の声に合わせて丸太の上を動き、止まる。これを繰り返しながら渡りきると、また最初から「もう1回!!」と始める。最近覚えた遊びをアレンジし取り入れていく姿が見られ、2歳児の発達段階に応じた成長が見られていた。

(一本橋でじゃんけんぽん)

縄の上を両端から歩き、出会った場所でじゃんけんをする遊びの経験があった。一本橋で友達を誘い両側から渡りだす。その様子を見て、他の子どもたちも集まってくる。バランスを取りながら友達と共に遊びを楽しんでいた。

(島わたり)

一つ一つのクッションをいろいろなものに見立てながら渡っている。また、「落ちたらわにさんがいるよ」の声に反応し慎重に渡ったり、いろいろな動物を表現しながらジャンプで渡ったりしている。それぞれの動物で体の動き方も異なり、自分のイメージする動物の動きに沿って全身を使う姿が見られた。



ジャンプしたり、登ったりして、子どもたちがそれぞれに体全体を使って遊んでいる。クッションの丸太は、渡る、転がす等いろいろな方法で遊ぶことにより体感が鍛えられてきている。また、ワンタッチトレーニング鉄棒では、ぶら下がる事がお気に入りの子どもたちが多く、2歳児でも楽しんでいる。何度も繰り返しながら保育の中で取り入れていくことにより、少しずつ手や腕の力もついてきているように感じている。

<3・4・5歳児>

身体能力が高まっている3・4・5歳児は動きにもスピードが出てきており、身体を動かす楽しさを全身で味わう姿が見られていた。様々な形状のサーキットコースにより、「すごく楽しい!!」と友達と一緒に笑顔でコースを回る姿が見られている。組み合わせを変えたり、遊びに応じて子どもたちが自らコースを作ってみたり、以上児の遊び方が展開していった。



<その他>

たくさんの玩具が揃い、毎日「今日はこれで遊ぶ!」「昨日の続きしようよ」と、かわるがわる楽しんでいる。細かいブロックに挑戦する以上児や、音や感触を楽しむ未満児。

年齢によってさまざまな楽しみ方を味わっている。ブロックに関しては、最初は繋げることから始まり、形を作って、見立てて遊ぶ姿が次第に見られるようになり、遊びを創り出す楽しさをプロセスの過程の中で感じているようである。助成により玩具が増えたことで、友達と一緒に遊ぶ楽しさが倍増したように感じている。



<園開放>

地域の未就園児・保護者が来園する園開放の子育て支援の中でも元気っ子ジムが大活躍している。保護者が見守る中で、いろいろな形状の遊具に体全体で関わっている様子が見られる。保護者も同年齢児との関わり、保護者同士でのつながりを楽しみながら園開放に参加している。その中で、自分から遊具に触れて遊んでいく我が子に関わり、我が子が周囲の友達と関わる姿を微笑ましく見守る姿が印象的である。毎回の園開放「ひばりっこ広場」で活用させていただいている。



3. その成果と評価

開園当初の本園にとって、遊具が増えることにより遊びの充実が図れた。上記の報告については、元気っこジムによる子どもたちの関わりについて主に報告したが、その他の遊具についても子どもたちの興味関心の広がりにおいては多大なる恩恵を受けることができた。新しい遊具を使って、生き物の世界を表現したり展開したりして発想の幅を広げたり、異年齢交流の中で、新しい遊具を媒介として大きい年齢児が、小さい子に作り方を教えてあげたり、優しくかかわりながら一緒に遊んだりする姿も見られた。また、友達と一緒に遊びのルールを決めて遊びを展開したり、競う楽しさを味わったりする姿も見られている。年間を通して遊具とかかわっていく中で、より複雑化する行程を子どもたちが自ら楽しんだり、イメージを膨らませながら新しいものを作る楽しさを感じることができたり、そこから、友達と協働して遊ぶことでいろいろな思いを感じたりと遊びを自分たちで創り上げている姿は主体的にかかわろうとする育ちに繋がっているように感じている。

4. 今後の課題と展望

これまでの成果をみると、今回購入させて頂いた遊具は、安全性も高く、興味関心も広がりやすいものであるように感じた。子どもたちが協働して遊びを創り上げていくには、遊具が存在しているのみではなく、そこから、どのように遊びに発展させていくのかを保育者がしっかりと捉えていくことが必要であると思われる。遊びの展開を捉え、その環境にどのような変化をもたらしていくことが、個人の学び・集団としての学びに繋がっていくのかを日々保育者同士で研鑽していくことが望ましい。

今回助成していただいた遊具を活用し、今後の保育にどのように繋げていくのか、子どもたちの育ちと寄り添いながら園全体の成長を図っていきたい。

以上